

コロナ禍を経て大会の'これから'を考える

～あらゆる世代に活用される大会とは？



植物学会会長挨拶 寺島 一郎 (日本植物学会会長)
本テーマを取り上げた経緯 成川 礼 (東京都立大学・准教授)

パネルディスカッション あらゆる世代に活用される大会とは？

パネリスト： 東山 哲也 (東京大学・教授, 2020年名古屋大会実行委員長)
高山 浩司 (京都大学・准教授, 2022年京都大会実行委員)
片山 なつ (東京大学・准教授)
平田 梨佳子 (京都大学・特定研究員)
大竹 桃 (東北大学・博士後期課程)
司会： 成川 礼・木下 温子 (東京都立大学, 2021年八王子大会実行委員)

植物学会会長挨拶

寺島 一郎
(東京大学 名誉教授)

本テーマを取り上げた経緯

- 第80回 (2016年) 沖繩大会
- 第81回 (2017年) 野田大会
- 第82回 (2018年) 広島大会
- 第83回 (2019年) 仙台大会

コロナ禍による
オンラインツールの利用開始

- 第84回 (2020年) 名古屋大会 **オンライン**
- 第85回 (2021年) 八王子大会 **オンライン**
- 第86回 (2022年) 京都大会 **ハイブリッド**
- 第87回 (2023年) 札幌大会 **ハイブリッド**

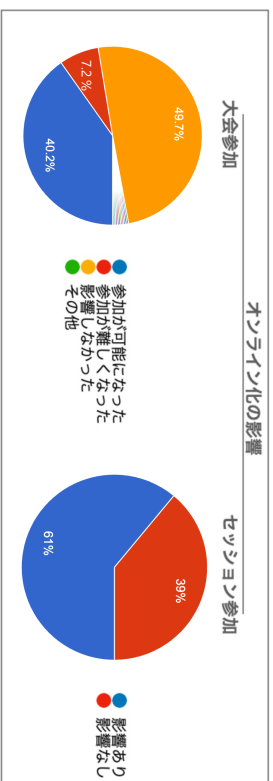
大会のオンライン化に関する意識調査

大会のオンライン化は大会参加可否に影響する？

アンケート配信：2020年10月5日

有効回答数：358件（2020年11月末日時点）

自由記述コメント：のべ295件



大会のオンライン化に関する意識調査

オンラインになったことで子どもとの普段の生活を続けながらも参加できるようになり、参加することにためらいがなくなりました。

普段聞かないようなセッションも気軽に参加できました。違う会場の発表でも一瞬で切り替えて数多くの発表を聞けた。

退職研究者にとっては学会は久しぶりに会う友人や同業の研究者に会える楽しみが会なのだが、オンラインではその楽しみがほぼゼロとなる。そのため参加する気になれなかった。

プレリミナリーなデータが多い時は、発表を控えようと思った。

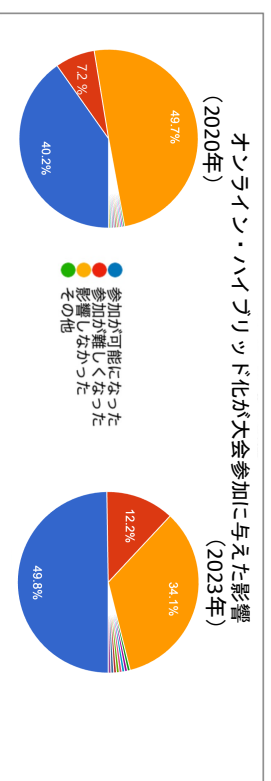
大会のオンライン化に関する意識調査

前回の調査から3年～現会員の意識は？

アンケート配信：2023年8月22日

有効回答数：206件（2023年9月4日時点）

自由記述コメント：のべ133件



もはや、全ての世代にとってオンラインの発表に慣れておくことは重要だと思います。一方で、対面で人が交わることで生まれる効果を最大化することも、日本の植物学の発展のためには不可欠だと考えます。

地方大学の学生が学会に参加するためには、ハイブリッド/オンラインでなくては難しいと考える。オンラインでは参加できるのは大型の研究費を持つ教員の研究室か大都市の機関の学生のみとなってしまっているのではないだろうか。運営の負担などのデメリットは大きい、それ以上のメリットがある。

顔を覚えてもらうこと、知らない人へのアプローチが難しくなるので、自己アピールやポジションの獲得においては不利になる（特に職を探す若手研究者にデメリットが大きい気がします）。

ポスター会場で知り合いになったり、研究協力の芽が生まれることが減りました。

本テーマを取り上げた経緯

- ・「オンライン化」を通じて、大会におけるダイバーシティ拡充の可能性や課題が見えてきた
- ・大会参加者の意識も変わりつつある（？）



アンケート結果や、世代間で意見を共有し、大会のあり方について議論する場を設けたい

パネリスト紹介



東山哲也 東大・教授
(2020年名古屋オンライン大会実行委員)



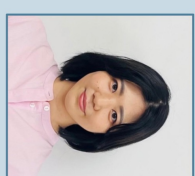
高山浩司 京大・准教授
(2022年京都ハイブリッド大会運営委員)



片山なつ
東大・准教授



平田梨生子
京大・特定研究員



大竹桃
東北大学・博士後期課程

アンケート「20代」の自由記述欄より

“メリット：**費用面**から参加できる人が増える。
デメリット：**人的交流の機会が減少するため、学生が顔を売りにくくなる。**”

“オンラインだと**若手研究者としてはつながりを作る機会が失われている**ように感じる。また、オンラインからの質疑応答があった場合間延びすることが多いのでできれば基本オンサイトにして欲しい”

“大会のオンライン化によって、発表会場の移動がしやすくなっており、**様々な分野の発表を気軽に聞ける**ことがメリットだと思っています。その一方、**新しく誰かと出会う機会が少なく、既存の研究者同士のネットワークにも入ることも困難**だと感じています。”

“これまでポスター発表では専門が異なる研究者がいろいろと訪ねて思わぬ意見を頂けると**いう機会があったのですが、オンラインになってからはそういった出会いがなくなり**、ポスター発表を選択しなくなりました。”

“学生からすると、たとえオンサイトであってもコロナ以前のスタイルでは新たな交流は生じにくいと感じているため、**オンライン化で参加者の間口が広がったり、面識のない相手でもコンタクトがとりやすくなる**(特にオンサイトだと不在だったり、口頭発表後に会えないということも多かった。)といった恩恵は大きい。”

Q1. 若い世代にはオンラインが気楽！？

Q2. ポスト探し、コロナ前と後で何が変わった？

2020年アンケート「子育て世代」のコメント

“土日に行われたので家族の都合上、あまり参加できなかった。平日希望。”

“発表や聴講に集中できる、ネット環境の良い場所の確保が困難なため、参加が難しい。特に今回は休日のため、家事育児が重なり、十分な聴講も困難であった。”

“今回は3日とも休日（土日祝）だったため、保育園が休みで子どもの面倒を見なければならず、3日間ともにほとんど参加できなかったです。どうにかやりくりして自分の発表時間だけ捻出した状況でした。平日開催だとうれしかった人もいたということは知っておいていただきたいと思います。全体的に大きな問題も無く大盛況に終わって、開催に携わった皆さんにはとても感謝しています。”

“子供が小さいため、地方で行われる大会には当分行けないと思っていましたのですが、今回オンラインで視聴のみの参加が出来て良かったです。休日に開催されて子供が家にいたため、本当に聞きたいセッションのみの視聴になり、実際の会場に行くよりはポスターなどをゆっくり見る時間は取れなかったように思います。”

Q3. 平日開催？休日開催？

2023年アンケート「子育て世代」のコメント

“**平日開催は、それが良い人と良くない人の両方いらっしゃる**ので、一概にどちらが良いとは言いきれません。”

“休日の日程が長い方が、子供を連れて参加しやすくなります。”

“全日程平日の場合、子供の学校を長期休むことになるためオンラインでの参加が難しい。”

“大会日程は固定せず各大会ごとにパリエーションがあると、数年スパンで考えると**いろいろな層の人が参加しやすくなる**と思います。”

“状況は個人によって違うので、**学会側の対応も多様である**と思う。忙しくてオンラインを望む方が多いかも知れないが、長期的な成長と貢献のためには、対面交流を最大限支援してほしい。”

“子育て中の女性研究者です。COVID-19でオンラインのイベントが多くなったタイミングで講演を頼まれる機会が増えました。オンラインは、物理的に声をかけにくかった層に大きなメリットをもたらしたと思います。一過的なものにしたくないです。”

2023年アンケートのコメント

“ハイブリッド大会は**運営担当の方が本当に大変**なので、オンラインまたはオンラインのどちらか一方に統一した方が良い。”

“大会運営者の負担が大きく、**特に地方での大会開催が困難**になると考えられる。学会として大会運営のサポート体制を充実させるべき。”

“教員にとっては、抜けられない学務や家庭の事情があっても参加できる点、学生や若手にとっては、対面で交流できる点で**ハイブリッド開催はメリット**がある。ただ、オンラインと対面の両方を実施するのは運営側に負担が大きいため、今後、オンライン参加は**参加費を上げるなど**も必要かもしれない。（それでもオンライン参加を継続する意味はあると感じる。）”

“大会のオンライン・オンサイトのハイブリッド化に伴って多額の負担が発生すると聞いていますが、実際にハイブリッド化でどのくらいの金額がかかるのか、実感が湧かないので、教えて欲しい。”

Q4. 持続可能な大会運営とは？

まとめ

- ・植物学会はミクロからマクロまで、シアノバクテリア・藻類から陸上植物まで、非常に幅広いバックグラウンドの方々が参加する学会がある。そのような多様性に富んだ学会だからこそ、多くの方々が参加しやすい大会を模索できるようでありたい
- ・大会開催側の会場・人員などの制約があるため、大会開催側の負担が大きくなり過ぎない範囲で開催形態をそれぞれ模索していくのが良い。参加費も大会毎に可変でも良いかもしれない
- ・会員として参加する側の方々もお客様としてだけでなく、自分も大会を盛り上げる「中の人」の一人であるという意識をもって参加してくるとありがたい
- ・運営側が今回はこういう形で開催すると決めたら、その開催形態の枠組みの中で、それぞれの会員の方々が如何に大会を満喫できるかを考え、大会に臨んでくれるとありがたい